

国際学会報告

International Conference on Culture Collections (ICCC15) 参加報告

2023年6月12日から開催された International Conference on Culture Collections (ICCC) の第15回大会に参加したので報告する。開催場所はポルトガル第二の都市ポルトから内陸に50 km程度入ったブラガ市のミーニョ (Minho) 大学であり、同大学やチリのラフロンテラ大学、MIRRI-ERIC (<https://ismirri21.mirri.org/>) 等の共催で行われた。ICCCはWorld Federation for Culture Collections (WFCC) の定例会議であり、2007年以後は3年おきに開催されている。ただし、近年の開催時期は予定どおりとはなっていない。第14回は本来2016年にトルコで開催される予定であったが、トルコ国内の治安の悪化によってキャンセルされ、2017年7月にシンガポールで開催された。第15回大会は2016年から3年後となる2019年11月にチリで開催予定であったが、10月から始まった反政府活動のため翌年11月に延期された。しかし、それもCOVID-19のパンデミックによって2020年3月には再延期が決まった。結局、今大会の開催発表は開催日の4ヵ月を切る2023年の2月半ばとなり、国際会議としてはおどろくほど直近の発表であった。このような遅さはその後も散見され、口頭発表を申請していた筆者が採択の連絡を受けたのは当初の予定を大幅に超過し、開催の20日前となる5月25日であった。ICCCの各種アナウンスメントやプログラムの確定が遅いことは、本誌による第13、14回の参加報告でも指摘されている。

今大会はハイブリッド形式で行われた。現地参加者は100名程度(図1)であり、会場は中サイズの講堂一つであった。オンラインでの参加者数は不明であるが、オンラインからは発表者・質問者ともにわずかであった。ICCC12-14では230-400名の参加者があったことを考えれば、ICCC15は大変な少人数だったと思われる。日本からの現地参加者は3組織5名であり、アジアの他からは中・韓・タイ・台湾であった。なお、筆者の所属である国立環境研究所の微生物系統保存施設(MCC)はWFCCのメンバー機関ではないが、参加費や発表においてメンバー機関所属者との区別はなかった。

大会は5日間にわたり、7つの基調・招待・受賞講演とセッション等(表1)でのおよそ60の口頭発表、および60程度のポスター発表が行われた。筆者は、MCCで行っているABS(遺伝資源のアクセスと利益配分)対応につ



図1 Minho 大学構内で撮影された ICC15 の集合写真

いて報告するとともに他機関での対応状況を知ることが目的であった。ただ、今回の ICCC では ABS に関する発表は少なく、セッション 2 (表 1) での 4 つの発表だけであった。このセッションでは、German Collection of Microorganisms and Cell Cultures (DSMZ) の Scholtz 氏から、最近の ABS 情勢に関する情報提供があった。2022 年末に行われた生物多様性条約の第 15 回締約国会合 (COP15) で Digital Sequence Information (DSI, 定義はされていないが少なくとも公的データベース上の DNA/RNA 配列情報が含まれる) が利益配分の対象となることが決まったこと、公海など国家管轄権外区域の海洋生物多様性の保全及び持続可能な利用に関する協定 (BBNJ 協定) でも海洋遺伝資源およびそれらの DSI の利益配分が盛り込まれていること、食料・農業遺伝資源条約 (ITPGRFA) では対象種の拡大が議論されていることなど、いずれも今後のカルチャーコレクションの運営に影響を与える重要なニュースであった。また演者らが行った INSDC (DDBJ など) のアクセス解析からは、「すべての国が DSI の提供国かつ利用国」であることが示され、これは「先進国が発展途上国由来の DSI を利用している」という COP での DSI 利益配分の発端となった考えに疑義を呈するものであった。ブラジル Oswaldo Cruz Foundation (FIOCRUZ) の da Silva 氏からは、自国の ABS 法令による制限のために International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology (IJSEM) での新種記載ができないブラジル・インド・南アフリカについての状況が整理された。ブラジルについては、制度の一部改正によりコレクションからの利用に制限がかからなくなる見込みとこのことである (詳細は da Silva *et al.*, 2023)。その他、ベルギーの Desmeth 氏からは ABS を含む EU 域内での規制の全体像などの紹介があり、世界的な所有権機関 (WIPO) の担当者からは特許微生物寄託制度と ABS の問題点が指摘された。

筆者はセッション 9 において、「過去に寄託された株の原産国への返還」「MCC からの分譲情報の原産国への報告」「原産国法令の確認など寄託以前の ABS 支援」など MCC で取り組んでいる名古屋議定書枠外を含む ABS 対

表 1 ICCCI5 の主なプログラム

Lectures

- Opening 1: Future needs for microbial diagnostics: tools and resources - Ellen Jo Baron, Stanford University (Retired), USA
- Opening 2: MIRRI: The Strategic Research and Innovation Agenda for 2021-2030 - Rosa Aznar, CECT, Valencia University, ES
- Invited 1: WFCC for wellbeing of the mankind and advancement of science and technology - Ipek Kurtboke, President of the WFCC, AU
- Invited 2: Effects of long-term phosphorus fertilization on bacterial community structure and its potential gene function related to phosphorus mineralization in pastures, María de la Luz Mora, UFRO, CL
- Invited 3: Fungal culture collections in 21st century, Wieland Meyer - Incoming Director of Westerdijk Institute, NL
- Invited 4: The importance of bacteriophage collections for the development of phage therapy - Luis D.R. Melo, CEB/LABBELS, UMinho, PT
- Skerman Award: Advanced systematics of Actinobacteria: a key to exploiting their biotechnological potential - Imen Nouioui, DSMZ, DE

Sessions

- 1: Circular Bioeconomy
- 2: Legal & Policy Issues for Culture Collections
- 3: Microbiomes
- 4: Overview on Microbial Preservation Techniques
- 5: Microbial Systematics
- 6: Bioinformatics & Data Management in Culture Collections
- 7: National & Regional Network of Culture Collections
- 8: ECCO Symposium - New Services for Public Microbial Collections
- 9: IS_MIRRI_21 Symposium on Quality Management Systems - Global Perspective
- 10: IS_MIRRI21 Symposium on Quality Management Systems - Europe & the World

Others

- Round Table: Cutting Edge Technologies In Microbial Culture Collection Services
 - WDCM & MIRRI Joint Training Course for Big Data of Open Science in Microbiology
-

応について報告した。議場からは個人情報保護との兼ね合いや、寄託者の責任などについて、比較的多くの質問・意見があったほか、休憩中には、MCCの取り組みへの歓迎・興味などのコメントを受けた。

今大会では、ISO 20387（バイオテクノロジー-バイオバンキング-バイオバンキングの一般要求事項）を中心に各種ISOへの取り組みについても多くの発表があった（セッション9, 10など）。高度な品質管理は、コレクション間、または他分野と連携する上でも重要との認識に基づいている。特にEUではMIRRI（Microbial Resource Research Infrastructure）またはERIC（European Research Infrastructure Consortium）全体でISOへの積極的な取り組み姿勢が伺えた。一方で、バイオバンク系のISOが乱立傾向であることも認識されており、合理化が必要であることなども議論された。

最終日の総会では、理事の任期切れに伴う改選についても報告された。例年はICCCで新理事の選出が行われるが、今大会では行われておらず、今後1年程度かけて郵便投票によって選出するとのことであった。会長職も改選となる。なお、今回のスカーマン賞は、放線菌研究者であるImen Nouioui博士（DSMZ）が受賞した。

本報告の作成にあたり、理化学研究所バイオリソース研究センター微生物材料開発室（JCM）の西原氏からコメントをいただき、ICCC15実行委員長のNelson Lima氏からは集合写真（図1）の掲載許可をいただいた。ICCC15のプログラム等は2023年10月12日現在も<https://www.iccc15.com/>から閲覧可能である。

da Silva, M., Desmeth, P., Venter, S.N., Shouche, Y. & Yurkov, A. 2023. How legislations affect new taxonomic descriptions. *Trends Microbiol.* **31**: 111-114.

（石田孝英）